



今年、私の身内では叔母「愛ちゃん」と、私の妹の義母「西堂ウラさん」の二人が天に帰りました。二人とも長寿を与えられて、素晴らしい思い出をたくさん残し、親切にして下さったことに、感謝しています。

今週、ウラさんを富士霊園に納骨いたします。写真のように、綺麗でお洒落な女性です。函館の遺愛女学校で学び、洗礼を受け、純真な信仰の求道の思いを持って、青山学院に進まれ、卒業後に西堂昇牧師と結婚され、50年近く教会で働いてこられました。

ウラさんは大学ノートに「うらこのひとりごと」と題し、自身の思いを綴っておられました。それを葬儀の日に、記念に頂きました。とてもリズムカルに、童心のユーモアで、楽しげに、牧師の妻としての生活を歌っておられました。ごく一部ですが抜粋して紹介します。

若い牧師が電柱に 一枚ピラを貼りました 毎日毎日 貼りました
 とにかく人が来なければ セツカクの礼拝は 始まらない
 礼拝の場所は 出来たのだ 30の椅子 待っている 聖書讃美歌 揃ったよ
 この町の人を 待ちました 神のみ顔 仰ぐよに 空を見つめる 若牧師

夫は身重のウラさんを残して、兵隊として中国に送られました。1946年に復員してきて、すぐに、東京の下町、日暮里に、小さい教会を新たに設立したのです。若い牧師と子どもを抱いた妻が、教会を建てようと懸命に働き始める様子が、綴られています。夫への敬愛が滲み出ている文章です。

着いたところは ナメクジ御殿 運んだ人は髭老人 仙人みたい髭の人
 小澤老人の持ち小屋です 只で住ませてくれました
 畳み半分くらいの土間に入る 畳み2枚敷かれてる 畳み半分の板敷で
 台所なし トイレなし 小屋の板切り つっかえ棒 昼間は窓のかわりです

日本全体も戦後の貧しい苦しい状況でしたが、西堂牧師夫妻は、それ以上。でも教会を建てようと、果敢に懸命に働いたのです。子どもを育て、家庭を切り盛りして行かなければならない妻は貧しさの極致に立っています。やがて、しわ寄せが来るのは、まず妻だったでしょう。

牧師夫人の失明だ 朝になっても 真っ暗闇 一夜で失明したのです
 こりゃ手術しないと治らない 脳腫瘍ですと医者と言う 牧師夫人は覚悟した
 「私に 5人の子もいる この先 どうしたら いいでしょう けれど 神様
 私が死ぬようなことあったなら 御名を汚さず死ねるよう お守りください…」 と祈ります。

ご自身の突然の病にどれだけ驚き、悲しんだことでしょうか。けれども神様に委ねる思いにすぐになりました。自分ではどうすることもできない現実に直面し、嘆くのではなく、神さまが導いてくださるように生きたいと、腹をくくった素直な信仰がありました。ある意味で、単純、けれども、不安のない明快な生き方でした。不思議なことにララ物資(アメリカ提供の日本への救援物資)の中にあつたコーチゾンという医薬品を見つけてもらって、それを注射して、手術もせずに光が戻ったのです。医者にも分からない結果を生みました。それがまた彼女の信仰を強め、感謝の人となりました。

私は 皆語ります 皆さんに語らないではいけない 今まで出会った人々は
 神様の使いです ながい ながい 人生で 声を大にして言いたい言葉
 みんな みんな ハレルヤだ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ アーメン

ウラさんは、夢見る乙女のような方でした。純真に信仰を持って、大らかに、苦勞を笑い飛ばしながら、精一杯前進する女性です。ウラ夫人と共に、西堂牧師は思う存分、活躍できたと思います。